



逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず：
『とりかへばや』宰相中將の恋心について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片山, ふゆき メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010816

逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず

——『とりかへばや』宰相中将の恋心について——

片 山 ふ ゆ き

一、はじめに

物語などとして、暮れぬれば、風涼しくうち吹き秋来にける気色ことにおぼゆるに、いと起こすべくもあらず。尚侍の御方にもつゆの御消息伝ふる人もなく、こころの年ごろの思ひむなしうなりなばわが身の跡なくなりぬべきよしを言ひ續けて、恨むるさまの、いみじうあはれるに、このわたりにもかくぞ言ひけんかし、げに女にて心弱くなびかではえあるまじくもあるかな、さてもうしろめたのわざや、忍びてもさばかりひとつ心に靡かし果てでは、それをまたなきことに思ひ嘆きて、逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず、またかく添へて思ひ言ふよ、いかに隙なき心のうちならむ、と苦しきにも、さまざまあつかはるるに忍びがたくて、

ひとつにもあらじなさてもくらぶるに逢ひての恋と逢はぬ嘆きを
(巻二 二七二―二七三頁)

現存『とりかへばや』巻二。尚侍の男君にすかし出され、四

の君ともなかなか逢うことのままならない宰相中将は、「かたがたの形見」(二七〇頁)として男装の女君を訪ねる。が、ちょうどそのとき、女君は日中の暑さに衣を解き、休んでいるところであった。女君の隣に座って話などするうちに、その打ち解けた姿に彼は魅せられ、尚侍のつれなさを嘆きつつも次第に乱れ寄ってゆく。

前掲のくだりは、尚侍への恋心を切々と女君に訴える宰相中将の様子と、彼と自らの妻四の君との密通を知る女君の複雑な胸中が語られる場面にあたる。情熱的に自らの恋を語る宰相中将の前に、女君はまず四の君を思い、「げに女にて心弱くなびかではえあるまじくもあるかな」と宰相中将の男としての魅力を認めた上で、「さてもうしろめたのわざや」として彼の浮気な心を批判する。

その心中思惟に現れる傍線部「逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず」という一文は、出典の問題も含め、先行研究において解釈が分かれてきた難解な箇所である。本稿では、この表現の解釈を中心に、現存『とりかへばや』の言語表現の様相を

探っていく。

二、先行研究の解釈の動向

この「逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず」という表現は、その出現の唐突さも相まって、「逢ひても逢はぬ恋」が四の君に対する恋を指すとの見解は諸注一致しているものの、それが具体的にどのような恋を意味するのか、という部分に問題を抱え、後に続く「のひとつにてもあらず」をどう訳すかという点で解釈が分かれてきた。

鈴木弘道氏は「逢ひても逢はぬ恋」を『和泉式部日記』に出現を求め、「逢ひても実際には契りを結ぶこともない恋」の意とした上で、それに続く「のひとつにてもあらず」は、(四の君との恋)「一つだけではなくて」と訳出する²⁾。対して、今井源衛氏は、「逢ひても逢はぬ恋」を、後の女君の歌中の「逢ひての恋」および「逢はぬ嘆き」とあわせて、各々「逢不逢恋」、「逢恋」、「不逢恋」といった、歌合の歌題を借用したものとする解釈を示した³⁾。さらに、今井氏は当該場面における「逢ひても逢はぬ恋」の登場について、以下のように述べる。

現に宰相は四の君に逢っているのだから、「逢ひても逢はぬ恋」ではなくて、ちゃんと逢っておいた上で、さらに——という構文だが、いかにも持つてまわったいい方で不自然である。この言葉を使いたいばかりに無理をしたのである。歌合の歌題を物語中に生かすという新趣向のために、不自然な

文脈となったという理解である。そして、後の「のひとつにてもあらず」について、今井氏は、(逢ひても逢はぬ恋)「のひとつというわけでもないのに」として、「ひとつ」を「一の一種」の意として解す。

この今井氏の説以降、「逢ひても逢はぬ恋」を歌合の歌題「逢不逢恋」と同一視し、その上で「逢っていないながら、契りを交わすに至らぬ恋」(新編全集)とする解釈は踏襲されていく。一方、「のひとつにてもあらず」については、今井氏と同様に「のひとつではない」すなわち「ひとつ」を「一種」の意とするもの(新大系・新編全集)、鈴木氏のように「ひとつだけではなく」として後の「またかく添へて」につながるとするもの(学術文庫・新釈)、「逢ひても逢はぬ恋」ではないけれども、恋一筋というのではなく」と前の二つの意味双方を読み取るもの(中世王朝物語全集)とに分かれる。

当該部分の解釈について、「逢ひても逢はぬ恋」を、逢ひても肉体関係には及ばない恋としつつ、その典拠を歌題「逢不逢恋」に辿る考え自体は、今日では定説化しているといえる。ただ、そうして考えた時、やはりなぜ既に肉体関係のある四の君との恋を表現するために、あえて肉体関係が無い逢瀬を示すとされる、この「逢ひても逢はぬ恋」を用いたのかという疑問は残る。今井氏は歌題流用のための「無理」とするが、果たしてそのようなことなのであろうか。さらに、そもそも「逢ひても逢はぬ恋」と「逢不逢恋」とは本当に同一視できるのか。次

項からは、これらの点について検証していく。

三、逢ひても逢はず

まず「逢ひても逢はず」である。この表現は、『とりかへばや』成立以前の散文作品では、『平中物語』『和泉式部日記』『源氏物語』に確認できる。

さて、この男来て、簾のうちにて、ものいひける。この友だちの女、「わが徳ぞ」といひければ、「うれしきこと」など、男、女いひ語らふに、この、母の女のさがなものの、宵まどひして寝にけるときこそありけれ、夜ふければ、目さまして起き上りて、「あな、さがな。などて寝られざらむ。もし、あややある」といひければ、この男、簀子のうちに、はひ入りて隠れにければ、のぞきて見るに、人もなかりければ、「おいや」などいひてぞ、奥へ入りける。その間に、男、いで来たれば、「よし、これを見たまへ」「かかればなむ。命あらば」などいひけるほどに、「あやしくも、いませぬるかな」といへば、男、帰りぬ。

たまさかに聞けと調ふる琴の音のあひてもあはぬ声の
するかな

といひたれば、『平中物語』二七 五〇三―五〇四頁）
女は、ものへ参らむとて精進したるうちに、いと間遠なる
もころざしなきなめりと思へば、ことにものなども聞こ
えて、仏にことづけたてまつりて明かしつ。つとめて、「め

づらかにて明かしつる」などのたまはせて、

「いさやまだかる道をば知らぬかなあひてもあはで明
かすものとは

あさましく」とあり。

（『和泉式部日記』二五頁）

昨夜の心知りの人々は、「いかなりつらん、いとらうた
げなる御さまを。いみじう思すとも、かひあるべきことか
は。いとほし」と言へば、右近ぞ、「さもあらじ。かの御
乳母の、ひき据ゑて、すずろに語り愁へし気色、もて離れ
てぞ言ひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ
うちうそぶき口ずさびたまひしか」。

（『源氏物語』東屋巻⑥七四頁）

『平中物語』は女との逢瀬を画策するも、親の妨害にあつて帰つた際の歌、『和泉式部日記』も訪問したにもかかわらず契りを結ぶことを拒否された敦道親王の歌、『源氏物語』は、中の君のもとに身を寄せていた浮舟に、匂宮が接近した事件を受けて、女房たちが噂話をする場面で、乳母の妨害で実事に至らなかつた旨を、匂宮が「逢ひても逢はぬ」の意を持つ古歌を口ずさんでいたことから判断する右近のことば中に現れる。これらの例は、波線部の記述から、いずれも肉体関係には至らなかつた状態を示すものとして解せよう。なお、『平中物語』『和泉式部日記』の注釈書には、『とりかへばや』のものと同様に当該表現を歌題「逢不逢恋」と結びつけるものも見られる。⁽⁵⁾
つづいて歌集における用例を確認したい。

はるごとにあひてもあはぬこころかなはなゆきとのみふりがひつつ

〔赤人集〕一〇七

はるばるにあひてもあはぬ我が身かなはな雪にのみふりまさりつつ

〔千里集〕「詠懷」・一一九

年中にあひてもあはずなげきむ人のうへこそ我がみなりけれ

〔伊勢集〕三四四⁽⁶⁾

女の、たちよりたまへ、物きこえんといひたれは

ためてそたちもよるへきよの人のあいてもあはぬものはおもへし

〔藤原長能集〕（書陵部蔵）八四⁽⁷⁾

八日、かへりがちなるをりにや

かへさずはかさましものをたなばたにあひてもあはぬのちの心を

かへし

たなばたにゆかしきほどのあふことはまつもかへすものをこそおもへ

〔相模集〕五九・六〇

廿六番 左

入道正三位知家

玉の緒をくやしやあわによりつめてあひてもあはぬ人をこふらん

右勝

下野

くるれどもむなしき空をいくかへりおもひしらではながめかぬらん

左、玉緒めづらしきふしも侍らず、あひてもあはぬも心えがたきさまなり、右、むなしき空をいくかへり思

ひしらではながめかぬらんこそ、ことにをかしきこえ侍れ

〔春日若宮社歌合〕恋・五一・五二

散文作品の例に比べると前提の状況説明が少ないため、これらすべてを、肉体関係には至らなかった状態を示したものと断定したい。例えば『赤人集』は恋歌ではなく、春の歌であつて、肉体関係云々の話ではない。ここでは、春がいくら巡つてきても、春を迎えたという思いにならないことをいう。つまりは、実際（春を迎えた）と心（迎えたとは思えない）とのギャップを表して、「あひてもあはぬ」と表現するのだ。こうした詠み方は恋歌でも可能であろう。逢っている（実際）にもかかわらず、逢っていないような物足りなさを覚える（心・印象）という意である。

右の『伊勢集』および『相模集』は恋歌であり、歌中の「あひてもあはず」は、やはり恋人に逢つたのに肉体関係には及ばなかった状況を指すと解釈されている⁽⁸⁾。しかしながら、次の例は、「逢ひても逢はず」を詠み込んだ歌のもう一つの可能性を示している。

ふすほどもなくてあけぬる夏の夜はあひてもあはぬ心地こそすれ

〔源氏釈〕

これは、先の『源氏物語』東屋巻の、「逢ひても逢はぬ」の典故として『源氏釈』が挙げた出典未詳の歌である。『源氏物語』の例は、浮舟と契るに至らなかつた旨を示すものである以上、

同歌は前掲箇所の引歌としては不適當と判断される。ただ、この歌自体は、恋歌における「逢ひても逢はず」の広がり暗示する。夏の夜は短く、横になる間もないほどにはかなく明けてしまう。そんな夏の夜では、逢っていてもまるで逢っていないような心地がするというのである。初句に「ふすほどもなく」とあるものの、「あはぬ心地」と表すこの歌の主眼は、肉体関係の有無よりも、逢ったような気がしないほどのつかの間の逢瀬である。ここには、『赤人集』に見られた、実際と心、あるいは印象とのギャップが認められよう。

つまり、「逢ひても逢はず」とは、恋の文脈において、多くは肉体関係に至らなかつた逢瀬を表す一方で「心」や「心地」に結びつき、逢瀬を持った実際とのギャップ、すなわち逢瀬に満足できない恋心を表し得る表現であるのだ。この点は、同表現を解釈する上で念頭に置く必要があるだろう。

四、歌題「逢不逢恋」

「逢ひても逢はず」と歌題「逢不逢恋」との関係について、両者を結びつける説明は、前述の通り『とりかへばや』の注釈以外にも見られる。一方で、『歌ことば歌枕大辞典』⁽¹⁰⁾は、

逢ひ初めに喜ぶのもつかの間、契った後に逢瀬が絶えて「逢ひて逢はず」の状態になり、(略)題詠の歌題にも、「初逢恋」「逢不逢恋」「会後増恋」「会無実恋」「会後隠恋」など「あふ」にかかわるものは多い。なお、「逢ひても逢はず」

というと、契った後に逢瀬が絶える意ではなく、(略)対面しても男女の契りを結ばない状態という場合もある。と両者が完全に同一ではなく、一定の区別があることを示唆する。さらに、『和歌大辞典』⁽¹¹⁾は「遇不逢恋」を、

金葉集初見。堀河中納言歌合・堀河百首などの歌題。勅撰集にこの題の明示された歌が一〇五首ある。時代が下るにつれて好まれた。題意は、一度逢つてのち何らかの事情で再びは逢えない恋の心情。いずれも女の立場で読む。当初は歌中の女になりきって逢つた夜の嬉しさとその後の苦痛を較べ、逢った時死ねばよかったと詠じ、再会の約束を斟酌し、一途に恋人の姿を夢や面影に求める。しかし相手を恨む歌はほとんど詠まれない。(略)全般に物語世界に最も近い歌題であるが、源氏物語などを踏まえた物語取りの詠はさほど多くなく、また逢わなくなった原因に具体的に触れる詠もほとんどない。類題に「契不逢恋」。

と説き、「逢ひても逢はず」について触れることはない。歌題「逢不逢恋」とは「一度逢つてのち何らかの事情で再びは逢えない恋の心情」と断定した上で、「逢ひても逢はず」との接点については言及しない。両者を同一視しない姿勢と考えられる。そもそも「肉体関係に至らなかつた逢瀬」と「一度逢つた後に再び逢えない恋」とでは、意味上大きな開きがある。共通のテーマに沿って歌を詠む題詠歌の歌題に、それほどの意味上の揺れが許容されるのであろうか。

では、歌題「逢不逢恋」について具体的に見ていく。この歌題の初出は、天延三年の『堀河中納言家歌合』である。そして、『堀河百首』以降、「逢わずの恋」「後朝」などと同様、同歌題は恋の基本題として広く詠まれた。その詠みぶりは、結論から先に述べると、現存『とりかへばや』の成立と同時代といえる、建仁元年（一二〇一）に催された『新宮撰歌合』の左記の例に見える通り、波線部のような「一度逢ったものの、その後逢瀬が途絶えた」恋の状況を、歌中に明示したものが数多く確認される。

三十二番 遇不会恋 左持

寂蓮

うらみわびまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空

(六三)

右

丹後

忘れじのことの葉いかなりぬらんたのめしくれは秋風ぞふく

(六四)

左右たがひよろしきよしを申す、判者、両首共以優也、勝負さだめ申すに不及

三十三番 左勝

内大臣

あひ見しは昔語りのうつつにて其かねごとを夢になせとや

(六五)

右

定家朝臣

人ごころほどは雲井の月ばかり忘れぬ袖のなみだとふらむ

(六六)

判者云、右の歌よろしくきこゆれど、猶左はまさるべし

三十四番 左勝

左大臣

しばしこそこぬよあまたとかぞへても猶山のはの月を待ちしか

(六七)

右

具親

なかなか又たのまるる世なりけりかかるべしとは契りやはせし

(六八)

左方申云、右歌宜しといへども、題においては左歌尤可勝歟、判者同之

三十五番 左

権中納言公繼

たえぬるはわがころともいひつべし涙をとばいかがこたへむ

(六九)

右勝

公經

あはれなる心のやみのゆかりとも見しよの夢をたれかさだめん

(七〇)

右歌殊に可勝之由、左右たがひに申之、判者同之

三十六番 左勝

通具朝臣

契りきやあかぬわかれに露おきし暁ばかりかた見なれとは

(七一)

右

宮内卿

うらみてもぬるる袖かななき名のみをしまの磯の蟹ならねども

(七二)

左申云、右歌、遇ひてあはぬ恋のころ、おぼつかなし、判者云、以左可為勝
〔新宮撰歌合〕

そうした中にも、「逢ひても逢はず」の恋に近いとも思われる歌も存在する。右の「うらみても」歌である。歌中に見られる「なき名」という表現は、

けさよりはわがいつはりになりはててなき名ぞとだにえや
はいはるる

〔万代和歌集〕卷十一・恋三・「逢無実恋を」・二一八一・源孝行

という例のように、「逢ひても逢はぬ」恋に意味上通じる歌題「逢無実恋」の歌にも用いられる語であって、実事はないにもかかわらず、噂ばかり立てられるといった趣旨としての解釈を許容する詠みぶりといえよう。だが、判詞は、この歌について「遇ひてあはぬ恋のころ、おぼつかなし」と批判する。すなわち、「逢ひても逢はぬ」恋の解釈を許容する詠みぶりが、かえって題意にそぐわないと判断されたのであろう。

その他にも、

あひてあはぬこひ

かげろふのほのみし人のこひしさにあるにもあらずこひぞ
けぬべき
〔祐子内親王家紀伊集〕六九

という歌は、傍線部の表現から「逢ひても逢はず」の状況を想定することもできるものの、同箇所には異文があつて、「堀河百首」では該当の表現が、「ほのみし人に逢ひみれば」となっ

ている。⁽¹³⁾この場合は、逢瀬を持った仲であることが明示された形である。

もちろん、「あひてあはず」の表記で「逢ひても逢はず」の意を持つ例も確認される。ただ、これらは歌題ではなく、

ある女にはじめてあひて物ごしに夜もすがら申しかた
らひて帰る朝につかはしける

あひもせずあはずもあらぬけふやさはことありがほになが
めくらさん

ひをりの日の車の心ちこそすれと云ひつかはしたりし
かは

今朝こそはならはぬみにもあひてあはぬ恋とはこれを思知
りぬる
〔頼政集〕五二八・五二九

遇無実恋

あひてあはぬこひとはなにぞからころもかさぬるよはのう
らみなりけり
〔無名和歌集〕一〇〇

とあるように、歌中のことばである。これらは音数の問題で省略されたと見ることができ、そのような制約のない散文と同じに考えることはできない。

以上、歌題「逢不逢恋」と「逢ひても逢はず」の関係を見てきたが、両者は別のものとするのがこの時代の一般的な理解であったという結論が、こうした例からは導き出せよう。少なくとも、『とりかへばや』における「逢ひても逢はぬ恋」の唐突な出現を、歌題転用の趣向によるものとは説明できまい。歌題

「逢不逢恋」と『とりかへばや』の該当表現とは切り離して考へるべきである。

五、『とりかへばや』の「逢ひても逢はぬ恋」

それでは、現存『とりかへばや』における「逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず」という表現は、どのように解釈すべきなのか。それを考える上で、後代のものといえ、次の例は示唆に富んでいる。

まことに幾重の峰の白雲何ならず、端山のしげりを分け入り給ひしかど、稀に逢ふ瀬はなかなかにて、夕つけ鳥も待たで明けにし見果てぬ夢のなごりには、生ける人にてやはおはせし。(略)

男は逢ひても逢はぬ夢の浮橋逢絶えても、待ちわたらんことはかたく、はかなかりし闇のうつつの御なごり、生きてかひなき身にとまり、

『いはでしのぶ』巻一 一五―一七頁

これは、鎌倉時代成立と目される『いはでしのぶ』の散文中に現れた「逢ひても逢はず」の例である。一品の宮に恋焦がれる大將は、秘かに近づき思いを遂げる。その後、突然の大將との関係に衝撃を受けた一品の宮が涙にくれ、嘆き悲しむことで、二人の逢瀬も一時途絶えてしまう。

大將と一品の宮との関係を考えれば、傍線部の表現「逢ひても逢はぬ」は、肉體関係の無かったことを意味するものとはな

らない。となれば、ここでの同表現は、肉體関係の有無を示すのではなく、大將のはかない逢瀬に対する焦燥感を表すものとして解釈できる。一品の宮とは逢いながらも、逢わなかったような感覚を覚える夢のような逢瀬ということである。

恋焦がれ、様々な障害を越えて恋人に逢うも、その逢瀬では飽き足らない男の焦燥感。『とりかへばや』の例も、こうした意を持つものとして捉えることができるのではないか。

改めて当該表現が出現するまでの文脈を思い起こしたい。重複になるので再度引用することはないが、当該表現出現へと至るまでの流れを確認する。男装の女君は、宰相中将の尚侍への恋心を聞き、「このわたりにもかくぞ言ひけんかし」と、まず妻四の君とのことを思い、「げに女にて心弱くなびかではあるまじくもあるかな」として四の君が靡くのも当然といえる宰相中将の魅力を認識する。その上で「さてもうしろめたのわざや」と、四の君への恋と尚侍への恋の二つに揺れる宰相中将のあだなる心について言及していく。

そこでまず、四の君への恋心として語られるのが、「忍びてもさばかりひとつ心に靡かし果てでは、それをまたなきことに思ひ嘆きて」の部分である。忍んで逢っていても、完全に相手を靡かせてしまわなければ、この上なくつらいこととして嘆くという。宰相中将の激情が男装の女君の目を通して語られるわけであるが、この心情こそ、恋する男の焦燥感を表した「逢ひても逢はず」の恋に通じるのではあるまいか。逢っていても飽

き足らず、逢っていないかのように嘆く宰相中将の激しい恋心。そうした意として見れば、当該の「逢ひても逢はぬ恋」は十分筋が通る。

それほどの激しい恋心を四の君に寄せていたにもかかわらず、宰相中将は「ひとつにてもあらず」、つまりその恋一つだけでなく、「またかく添へて」、すなわち尚侍への恋までを加えて訴えてくるとは。女君はあきれ、「いかに隙なき心のうちならむ」と彼の多情性を思うのである。

今井氏は、先述の通り、ここに見られる「ひとつ」を「一種」の意としてとる。しかし、そのすぐ後に続く女君の歌中に見える「ひとつにもあらず」という表現を考えれば、これも、歌と同様に、ただ一つの「一つ」として捉えるべきではなからうか。あくまでも同表現は、恋の相手を一人に留めることのできない宰相中将を目の当たりにした、女君の心中が表された文の一部である。当該のくだりは、一貫して宰相中将の恋の情熱と二心が語られたものと考ええる。

六、おわりに

以上、現存『とりかへばや』における「逢ひても逢はぬ恋のひとつにてもあらず」という表現について検討してきた。

「逢ひても逢はず」を『平中物語』や『和泉式部日記』に見られるような、逢っていても肉体関係に至らない状態を意味する表現としてのみ解すと、四の君と宰相中将とは既に子まで成

した仲であるから、二人の関係にそぐわず、『とりかへばや』の当該箇所文脈は非常に難解なものとなる。そこで、歌題「逢不逢恋」の流行を第一目的とした表現という理解が出てきたわけである。しかしながら、先に見たように、歌題「逢不逢恋」とは、あくまで一度逢った後に逢わなくなる恋のことを指すものとして提示されており、「逢ひても逢はず」とは、『とりかへばや』成立の時代に混同されていたとはいえない。歌題を使いたいばかりに「無理をした」という理解は、少々荒っぽいものにも感じられる。

けれども、この「逢ひても逢はず」という表現は、「逢ふ」という語自体が持つ意味の多様性に連動するかのようになり、一義に限定されない広がりを持っているのである。逢っても逢ったとは思えないような飽き足らない心。恋の文脈においてはそれが男の焦燥感を表すものとなる。そう解釈すれば同箇所の文意は通る。そして、ここで強調されているのは、宰相中将が見せていた恋の激情、情熱的な恋心の模様なのである。

男装の女君は、目の前で尚侍への恋心を情熱的に訴える宰相中将を見たとき、その男性としての魅力を感じている。それは、これから二人の間に男女の肉体関係が生まれる予兆ともいえよう。ただ、女君はその時、彼の恋に対する情熱と二心を同時に認識するのである。四の君への恋心が、「逢ひても逢はず」の恋ともいえるほど焦燥感に駆られる激しいものに見えていたからこそ、そこに尚侍への思いまで加える宰相中将のことばは空

疎に響く。彼の情熱的な恋心のアピールは、女君にとっては多情性の裏返しなのである。つまり、情熱の裏の多情性をさらけ出す宰相中将と、二心を見透かす女君との恋の破綻は、その恋が始まる前に見えている。¹⁵⁾現存『とりかへばや』の当該箇所は、そうした二人の恋の破綻の必然化を表すくだりともいえよう。

注

- (1) 本稿における引用本文には、『とりかへばや』は『新編日本古典文学全集』（石埜敬子 小学館 二〇〇二年）を使用した（以下、新編全集）。その他、『平中物語』は『新編日本古典文学全集』（清水好子 小学館 一九九四年）、『和泉式部日記』は『新編日本古典文学全集』（藤岡忠美 小学館 一九九四年）、『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館 一九九四—一九九八年）、『いはでしのぶ』は『中世王朝物語全集』（永井和子 笠間書院 二〇一七年）を用い、ルビに関しては省略した。和歌に関しては、特にことわりがない限り『新編国歌大観』によった。傍線等は稿者による。
- (2) 鈴木弘道『とりかへばや物語の研究 校注編解題編』笠間書院 一九七三年
- (3) 今井源衛（鑑賞日本古典文学）『堤中納言物語・とりかへばや物語』角川書店 一九七六年

(4) 『學術文庫』（左記に詳細）は、「逢ったのち逢えなくなつた恋」とする可能性も示している。以下、諸注の解釈を挙げる。

桑原博史（講談社學術文庫）『とりかへばや物語全訳注』講談社 一九七八—一九七九年（以下、學術文庫）

逢つても実際に肉體關係におよばぬ恋。ここでは四の君に対する恋をさしているので、実際には肉體關係がある。むしろ、逢つたのち逢えなくなつた恋の意にもなる。本来、歌合の歌題で、天延三年二月十七日庚申堀河權中納言朝光歌合、康和二年四月二十八日宰相中将国信歌合などに見える。「逢ひて逢はぬ恋」から生まれた表現であろう。

田中新一・田中喜美春・森下純昭『新釈とりかへばや』風間書房 一九八八年（以下、新釈）

「逢ひても逢はぬ恋」は、平安末期の歌合の歌題によく見られる。「逢不逢恋」「遇不遇恋」「会不会恋」など。

今井源衛・森下純昭・辛島正雄（新日本古典文学大系）『堤中納言物語』とりかへばや物語 岩波書店 一九九二年（以下、新大系）

四の君とは「逢ひても逢はぬ恋」ではなく、はつきりと逢っているくせに、の意。平安末期の歌合の歌題、「逢不逢恋」を流用した。

友久武文・西本寮子(中世王朝物語全集)『とりかへばや』

笠間書院 一九九八年(以下、中世王朝物語全集)

平安朝後期に好まれた歌題「逢不逢恋」を用いたもの。

新編全集(一)に同じ。

歌合の歌題「逢不逢恋」による表現。逢っていないながら、契りを交わすに至らぬ恋をいう。

(5)『講談社学術文庫 和泉式部日記全訳注』(小松登美 講談社 一九八〇年)、『新編日本古典文学全集 平中物語』

(一)に同じ、『新編日本古典文学全集 和泉式部日記』

(一)に同じ)などに指摘がある。

(6) 同集三五九番にも「人の、あけぬ夜ふかくといふだいを」という詞書のもとに同じ歌が載る。

(7)『私家集大成』より引用。なお、『長能集』(神宮文庫本)では「あひてはあはぬ」という表現となっている。

をうなの、たちよりたまへ、物きこえんといひ
たれば

さだめてぞたちもよるべきよの人のあひてはあはぬ
ものはおもはじ

(8)『伊勢集全釈』(関根慶子・山下道代 風間書房 一九九

六年)、『相模集全釈』(武内はる恵・林マリヤ・吉田ミ
スズ 風間書房 一九九一年)など。

(9)『相模集』などの恋歌も、明確に肉体関係に関連したも
のとは詞書からは判断できないため、そうした解釈の余

地があるかもしれない。

(10) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書

店 一九九九年

(11) 犬養廉・井上宗雄・大久保正 他編『和歌大辞典』明治
書院 一九八六年

(12) 佐藤明浩「題の拡充と題詠の深化―恋題を中心に院政期
から新古今前後まで―」(和歌文学会編『論集(題)』の

和歌空間 和歌文学の世界』第十五集 笠間書院 一九
九二年)、長谷川範彰「遇不逢恋」の変容」(『立教大学

日本文学』九四 二〇〇五年七月)に詳しい。

(13) かげろふのはのみし人に逢ひみれば有るにもあらず恋ひ
ぞけぬべき

(14) 『堀河百首』恋十首・「遇不逢恋」・一二一五・紀伊)
会不遇恋とはなにぞから衣かさぬる夜半のうらみなりけ

り
(『拾玉集』四・「遇無実恋」・四三七三)

(15) 宰相中將の情熱の裏の多情性、および女君との恋の破綻
の必然化については、拙著『とりかへばやの研究―変奏
する物語世界―』(新典社 二〇一九年)において論じた。